＜Ⅵ　展示研究報告（2)-2＞

特別展の後に、被災地の博物館のこれまでとこれから

石垣　　悟*

はじめに

2011年3月11日「東日本大震災」。東北地方太平洋側を中心とした各地の博物館・資料館や文化財は、地震とそれに伴う津波で甚大な被害を蒙った。岩手県の最南端、陸前高田市にあった陸前高田市立博物館と陸前高田市海と貝のミュージアムもそうした博物館の１つである（写真1)。東京家政学院生活文化博物館では、被災した２つの博物館の活動を見つめる特別展「復興から未来へ～博物館と地域のこれから～」を開催した。拙稿では、これに関連して被災した博物館資料（文化財）のレスキューを振り返るとともに、博物館のこれからを考えてみたい。

写真1　被災後の陸前高田市立博物館

文化財レスキューの共有

文化財レスキューは、震災後、ほどなく開始された。オールジャパンで行われた広域的な文化財レスキューは、おそらくこれが初めてといってもよい。まず行われたのは、津波に飲み込まれながらも流失を逃れた資料を安全な場所へ救出・移動することであった。一次レスキューである。一次レスキューは、いわば避難所への避難と同じで、時間との勝負であった。

次いで、二次レスキューとして、資料の清掃、修理、保存処理が行われてきた。二次レスキューもまた、レスキューの初期段階から行われてきたが、実は10年経った今も続けられている。陸前高田市の場合でいえば、救出・移動した資料、約46万点のうち、2021年3月時点で二次レスキューまで完了できた資料は、半分の約23万点に留まる。単純計算しても、二次レスキューは、あと10年は続く可能性が高いことになる。二次レスキューは、除泥などの清掃から修理、そして滅菌、脱塩、脱臭といった一連の保存処理までを施す作業で、専門的な知識と高度な技術が求められる（写真2)。津波として押し寄せてきた「海水」は、通常の海水ではない。泥や油分を大量に含んだ黒い塩水、いわば「海水ではない海水」であった。文化財保護法制定（1950）以来、日本では極めて高度な文化財修理技術が培われてきたが、それでも「海水でない海水」への対処は未経験で、二次レスキューはほとんど手探りで進められてきた。現在に至ってもなお、すべての資料に対処できる万能な知識と技術を確立できたわけではない。

そうした中、今後起こるかもしれない災害への備えとするため、これまで蓄積された知識と技術を「安定化処理」の名のもとに、できるだけ多くの人々に共有してきたのが、「大津波被災資料連携プロジェクト」である。このプロジェクトは、各年度３回程度の展示とワークショップを実施するもので、岩手県のレスキューで先頭に立ってきた日本博物館協会や岩手県立博物館、東京国立博物館などを中心に組織された実行委員会によって企画・実施されてきた。陸前高田市内を会場として行うほか、全国の博物館も会場としてきた。東京家政学院生活文化博物館が行った特別展「復興から未来へ～博物館と地域のこれから～」（2020年11月～2021年２月）もその一環である。

*石垣　悟（いしがき　さとる）令和２年度現代生活学部現代家政学科准教授

写真2　二次レスキュー

コト情報の復元

二次レスキューに続いて、三次レスキューともいうべき作業が必要となる。その内容は、各資料の学術的な性格により異なる。筆者の専門分野である民俗学でいえば、資料のコト情報の復元がそれにあたる。民俗資料のレスキューでは、事物／モノの処理と並んで事象／コトの処理が不可欠である。これは聞き取り調査によって行われる。コト情報とは、端的にいえば、資料の名称（呼び名）をはじめ、使用地や製作地、使用時期、製作時期、使用者、製作者、使用方法、思い出などをいう。これらは目の前にある事物／モノを観察しているだけでは十分に把握できない。民俗資料が暮らしの中で生きていた様相を、当該民俗資料を使った人、作った人、使ったり作ったりする様子を見た人などから丁寧に聞き取り、それをできるだけ詳細に資料カードに記録していく。

コト情報は、通常、博物館が資料を収集する際に把握する。陸前高田市立博物館でも、民俗資料のコト情報は、被災前に一定程度把握されており、それが資料カードに記載されるとともにデータ化もされていた。しかし、それらもまた津波によってほとんど流失してしまっていた。被災したのは、事物／モノだけではなかったのである。

民俗資料にとって、コト情報は極めて重要である。その情報量も多ければ多いほどよい。従って、聞き取り調査では、できる限り多くのコト情報の把握に努める。なぜ、コト情報が重要なのか。博物館活動に絞っていえば、それは展示・教育に不可欠であるからに他ならない。周知のとおり、博物館活動は、資料の収集、資料の保管、資料の調査研究、資料の展示・教育という４本の柱から成り立っている。このうち、一次レスキュー／救出・移動は資料の収集、二次レスキュー／清掃・修理・保存処理は資料の保管に直接関係するだろう。いっぽう、三次レスキュー／聞き取り調査は、資料の調査研究に関係し、同時にその先には資料の展示・教育が見据えられている。というのは、三次レスキューで復元されるコト情報は、展示や教育の場でキャプションや解説文、映像、音声、ギャラリートーク、講座などを通して来館者に伝えられるからである。来館者は、事物／モノを観覧しつつ、コト情報を受け取ることで理解の深め、興味関心の幅を広げていく。博物館における民俗資料は、事物／モノと合わせて事象／コトも展示・教育に用いられることで真の民俗資料となる。

陸前高田市立博物館の民俗資料の三次レスキューは、まだ始まったばかりである。東京家政学院大学では、2019 ～ 20 年度にかけて陸前高田市からの委託（代表・石垣悟）を受けて漁撈に用いる民俗資料、約 2600 点に関するコト情報を復元した。こうした作業が完了し、民俗資料の展示・教育に用いられたとき、真の復興も見えてくるのではないだろうか。

展示・教育と真の復興

その点でいえば、博物館活動の４本の柱が立っていない施設は、博物館とは呼べないともいえる。被災した陸前高田市立博物館と陸前高田市海と貝のミュージアムは、この 10 年間、多くの人々の努力と協力を得ながら確実に歩みを進めてきたが、その活動の中心は資料の収集と資料の保管という２本の柱であった。資料の調査研究も少しずつ立ち上がりつつあるが、資料の展示・教育は残念ながら自前で立ち上げることはできずにきた。地域に立脚する博物館にとって展示・教育は、地域社会との関係を恒常的に取り結ぶ唯一無二の活動である。それは、地域社会に開かれた「博物館の顔」ともいえるだろう。震災後 10 年間、顔を持ち得なかったもどかしさは察するに余りある。おそらくはそのためであろう。陸前高田市は、この 10 年間、博物館を「陸前高田市立博物館（仮）」と称してきた。（仮）の字には、博物館としての矜持が垣間見える。そうした中で実施されてきたプロジェクトの展示・ワークショップは、大きな意味をもってきたといえよう。それは、一時的ではあるが、陸前高田市立博物館（仮）の（仮）が取れ、博物館が顔をもつことのできる貴重な機会でもあった。特別展「復興から未来へ～博物館と地域のこれから～」は、そうした重要な役割を担っていたことも強調しておきたい。

拙稿を執筆している 2021 年８月現在、陸前高田市では新しい博物館の建設が進められている（写真 3）。

被災前の陸前高田市立博物館と陸前高田市海と貝のミュージアムの２館を統合した新陸前高田市立博物館である。建物自体はほぼ完成し、目下展示の作り込みが進行中である。有害ガスを放出する枯らしのため、資料自体の搬入・展示はまだ先であるが、展示の内容、キャプションや解説文などには、プロジェクトで公開されてきた知識・技術をはじめ、三次レスキューで復元されたコト情報などが如何なく発揮されるだろう。ようやく恒常的に４本の柱が揃うのである。今後、陸前高田市立博物館には、この４本の柱を太く、そして強固なものとしていく活動が求められる。その先にこそ博物館としての復興があるはずである。

同時に、二次および三次レスキューもしばらくは継続することになる。その終わりは、未だ見えていない。皮肉なことであるが、レスキューの継続自体が震災の記憶を色褪せないものともしている。震災の記憶を刻み込んだ46万点もの資料を収蔵する博物館は、おそらく他にない。それは、陸前高田市立博物館（仮）が背負ってしまった十字架なのかもしれない。新陸前高田市立博物館が開館した暁には、ぜひ足を運んでほしい。そこには震災・被災と戦いながら「博物館とは何か」「災害とは何か」にまっすぐ向き合ってきた博物館の顔／真の復興が垣間見えるに違いない。

写真３　建設中の新陸前高田市立博物館